連載 プロマネの現場から
第 156 回 ジャズの都・上海

蒼海憲治（大手 SI 企業・上海現地法人・技術総監）

今年の春節は大移動が始まる１か月余り前から、新型コロナの感染抑制のため、上海市や会社から極力市外に出ないようにという移動制限が推奨されていたこともあり、赴任して初めて２か月余り、出張も旅行もせず、上海市内にいました。上海から外に出られないため、足を運んだところの一つが、ライブハウスのあるジャズバーでした。普段なら内外の観光客でいっぱいのため、予約しないと入れないジャズバーも、その日の気分で予約なしでも着席することができ、ジャズ音楽を楽しむことができました。

ジャズの様々なスタイルの生演奏を目の前で楽しみながら、この上海が、かつて「アジアのジャズの都」と呼ばれていたことを、再認識しました。

１．ジャズの魅力

そもそものジャズの魅力とはどこにあるのでしょうか。

一番の魅力は、アドリブ、インプロヴィゼーションと呼ばれる即興演奏にあります。

クラシックのコンサートと異なり、そもそも、演奏が始まるまで曲目が決まっていないケースもあるし、当然、曲順もきまっていません。また、たとえば、ある曲が演奏される場合では、最初、みんなで普通に演奏した後、１番目にサックスやトランペットがアドリブで演奏、２番目をベースやコントラバスがアドリブ演奏し、３番目にドラム、４番目にピアノやキーボードがアドリブ演奏し、最後にもう一度、みんなで演奏する、という流れになります。

そして、曲が決まっている場合でも、誰がどんな演奏をするのかを全くリハーサルしていないケースもあります。そんな中で、各ジャズ演奏者同士の掛け合いというアドリブ、インタープレイがあります。ライブで聴いていると、前の演奏者の演奏によって、次の演奏者が大いに刺激を受けている様子が伝わってきます。演奏者同士が、互いの感覚や感性、イマジネーションを刺激し合い、曲を共同制作している、ともいえます。演奏者同士が語らっていると表現する人もいます。

そして、スイング。ジャズ音楽を聴きながら、身体が自然と揺れてきます。このスイング感は、観客の気分を高揚させます。「スイングがなければ意味がない（It Don't Mean a thing)」という曲もありますが、このスイング感のおかげで、演奏者と観客が一体感を感じ、心から音楽を楽しむことができます。

２．上海ジャズの歴史

ジャズの発祥は、１９００年代初頭のアメリカのニューオリンズ・歓楽街ストーリーヴィルといわれており、まだ１２０年ほどしかありません。
アフリカから奴隷としてアメリカに連れてこられた黒人たちが、ヨーロッパからの移民と出会い、西洋の音楽とアフリカの音楽を融合して作られたのがジャズの始まりです。小さな町で生まれたジャズはその後、シカゴやニューヨークなど都市部に広がり、急速に発展を遂げます。アドリブの自由な演奏により作られるこの特別な空間が、様々な問題を抱えて生きていた人々の心のよりどころになったのだと思います。

上海が「東洋のパリ」とも「魔都」とも呼ばれて、最も繁栄した時代は、１９２０年代から１９３０年代にかけてといわれていますが、この時期が「ジャズの都」でもありました。
このあたりの状況については、富澤えいちさんの『ジャズ事始め』（＊１）に詳しく紹介されています。

≪1842 年、アヘン戦争で清（中国）に勝利したイギリスは南京条約を締結。このときに開港することになったのが、上海を含む 5 港だった。早速、イギリスをはじめフランスやアメリカ合衆国が上海に進出し、清の国内に租界を形成する。
租界には、条約で定められた行政自治権や治外法権があったため、航路が開かれている国の文化がダイレクトに運ばれて、根付いていくことになったと思われる。また、1865 年には香港上海銀行の設立を機にヨーロッパの金融機関が本格的な進出を始める。さらに、香港～上海～長崎を結ぶ海底電信ケーブルが敷設されたことでいち早く国際電信が可能になるなど、世界的な金融都市としての体裁が整っていく。こうして上海は、1920 年代には清における最大の都市となり、経済的な繁栄を背景にしたショービジネスの最先端都市としても成長していくことになったのだ。上海が世界有数の都市になった 1920 年代は、アメリカ合衆国が“ジャズ・エイジ”と呼ばれるほど、ジャズが“時代を象徴する音楽”だったころ。この上海租界の存在が、アジアにおけるジャズの普及に多大な貢献を果たしたことは想像に難くない。≫

上海が世界的な都市となるにしたがい、上海租界において、ジャズが盛んになります。当時の上海は、欧米人や日本人など 20 万人もの外国人が集う、中国最大で最先端の都市でした。外灘には、52 棟もの西洋式建築が建ち並んでおり、いまも欧米の雰囲気を残しています。

外灘の多くのビルには、現在もジャズバーが残っていますが、戦前はそこに、世界中からジャズメンが集まったといいます。

≪第二次世界大戦前の日本のジャズ・シーンでは、「上海帰りは箔が付く」と言われたそうだ。・・
“上海帰り”に“箔が付く”のは、・・祖界が世界的な金融都市として発展し、その恩恵を受けたナイト・エコノミーの熟成にジャズが貢献していたことと関係している。つまり、本国よりも景気が良いと聞きつけたアメリカの一流ミュージシャンが上海をめざすようになり、アメリカからもミュージシャンが来ているという噂を耳にした日本やフィリピンのミュージシャンが“本場の技術やセンスを学び盗ろう”と海を渡って行ったのだ。と、ジャズメンは向学心旺盛であるという前提で筆を進めてみたが、もちろんそれだけであるはずがない。上海行きで“箔を付ける”のは、ミュージシャンとしての自分の地位を高めるためであるのはもちろんなのだが、当時の事情を証言する資料のなかから、さらなる打算が隠されていたことを見つけることができた。それは、一緒にダンサーを連れて行く、というエピソードだった。どうやら、バンドマンが大挙して押し寄せる上海のナイトクラブには、「ダンサーを連れて来たら礼金を支払う」というシステムがあったらしい。≫

１９８４年の深作欣二監督の映画、風間杜夫と松坂慶子が演じた『上海バンスキング』で描かれた世界です。

≪ちなみに“バンスキング”のバンスとは英語の advance borrowing（前借り）を省略した日本語で、興行の世界ではこうした略語を符丁のように使うことが珍しくない。契約金代わりの前渡し金のほかに、レギュラー出演者には支払い予定分のギャランティーを担保にした借金を許していたそうだ。だから、バンスキングとは“前借り王”。興行主も出演者を確保する意味で“前借り”を“縛り”として利用し、出演者は不安定な生活の穴埋めにするだけでなく、自分の利用価値（つまり“前借り”を断られない限り自分には居場所があるという意味）を確認するかのように借金を重ねていったようだ。≫

ただし、映画と同様、前借したお金の多くは返済できず、ジャズメンも踊り子も、破滅的な結末にいたったようです。

ジャズには、ジャズの樹形図というべきものがあり、根っこにブルース、ゴスペル、ラグタイムなどがあり、ニューオリンズとなり、ビバップからハード・バップを経てファンキー・ジャズに発展していく中で、多くの亜種を生み出していきます。様々な演奏者によって新しいスタイルが生まれていきます。このジャズのスタイルの一つとして、上海において、独自のジャズのスタイルである“上海リヴァイヴァル”は生まれたのでしょうか。

富澤さん曰く、“上海リヴァイヴァル”というスタイルは、残念ながら「なかった」といいます。

≪“狂騒の 1920 年代”に上海で演奏されていたジャズは、それ自体が音楽的なサブ・ジャンルを確立するには至らなかったと言わざるをえない。理由として考えられるのは、当時のジャズが“最先端音楽”として利用価値の高いものだったから。つまり、単純にそのままコピーをすれば「最先端の音楽を演奏できる演奏家」として仕事にありつくことが可能だったと言っていい。演奏家が必死に努力したのは、ジャズを要素として用いた自己表現をするためではなく、ジャズの楽曲が求める高度な演奏技術を習得するためだった。そして、腕に覚えのある演奏家は一攫千金を夢見て上海をめざしたわけだけれど、そこで習得されたのはアメリカ本土を手本とするジャズのスタイルであって、オリジナリティの発露という段階にまでは及ばなかったと言わざるをえない。≫

３．上海おすすめのジャズバー

次ページ以降、個人的に何度かいった上海のジャズバーを紹介します。

（1）　ジャズ・アット・リンカーンセンター上海（林肯爵士楽上海中心）

2017 年にオープンした本場ニューヨークのジャズを鑑賞できるジャズバー。新型コロナ以前は、出演アーティストは全てニューヨークから招待された一流ミュージシャンでした。現在は、新型コロナのため米中の移動は制限されているため、上海に住んでいる欧米のミュージシャンと中国人ミュージシャンがコラボしているケースを多くみかけます。

（2）オールド・ジャズ・バンド（OLD JAZZ BAND、和平飯店・老爵士吧）

和平飯店（フェアモント・ピース・ホテル）はオールド上海期真っただ中の 1929 年にオープンした、中国では最も有名なオールドホテルになります。夜、1920 年代そのままの内装のこのホテルのロビーに入ると、すぐにジャズの音色が聞こえてきます。

オールド・ジャズ・バンドで演奏しているのは、「上海老年爵士楽団(老年ジャズバンド)」と名付けられているとおり、平均年齢 75 歳というだけあり、60 代後半から 90 代という高齢のジャズマンだけで構成されています。レパートリーは 70 曲以上といわれていますが、いまも 1930 年代の雰囲気を楽しむことができます。

懐かしい音色を聞きながら、90 歳近いジャズマンの活躍を目の当たりにすると、まだまだ頑張らないといけないな、とわが身を振り返ります。

（３）ロング・バー（廊吧）

外灘に面したウォルドルフ・アストリア上海（华尔道夫酒店）の二階にあります。オールド上海時代、領事や貿易商など租界の有力者たちが集うサロンとして設立された上海倶楽部になりますが、その内装の豪華さには感動します。

ロング・バーとは、その名の通り当時 37 メートルのバーカウンターから名付けられています。現在は 33 メートルに縮められているそうですが、それでも上海一長いカウンターになっています。かつて孫文や蒋介石、周恩来なども来店していたといわれ、歴史好きにはたまらないバーになります。

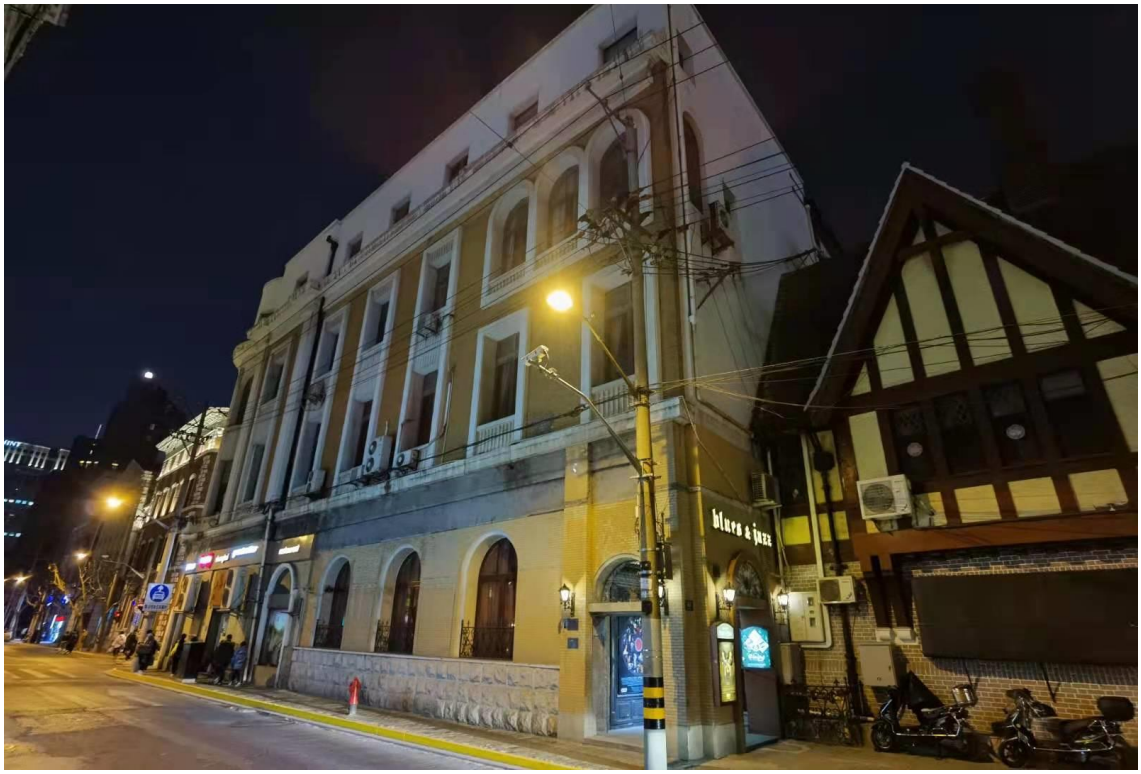
ニューヨークのウォルドルフ・アストリアは、敷居が高いのですが、ここはドレスコードなしで、普段着でふらりと立ち寄ることができるのがよいところです。

（4）ハウス・オブ・ブルース&ジャズ（HOUSE OF blues & jazz）

1995 年にオープンした外灘にある老舗のジャズバーの一つ。旧フランス租界の茂名南路にあった洋館を改装して造られたアメリカ南部風の黄色いレンガの建物が目を引きます。上海っ子なら誰でも知っている映画俳優の林棟浦氏がオーナー。バンドは、林氏自らが海外から招いたもので、ジャズはもちろん、ブルース、ラテンなどの音楽も楽しめます。

新型コロナ以前は、大勢の観光客で賑わいっていました。あまりに込み合っていたので落ち着かないという人もいましたが、新型コロナのいまの時期だけかもしれませんが、落ち着いて音楽を楽しむことができます。

ここは、レストランも併設されているので、少し早めに入店し、イタリアンなどを楽しんだ後、隣のジャズバーへ移動するのもよいと思います。



（５）ヘイデイ・ヴィンテージ・ジャズ・ラウンジ（Heyday VIntage Jazz Lounge）

上海交通大学の北側の旧フランス租界の中の落ち着いた住宅街の一角にあるジャズバー。月曜日を除く日替わりで、スタンダードなジャズだけでなく、ラテン系、シャンソン系など様々なスタイルのジャズを楽しむことができます。

ここの演奏が一番だという評判の声もありますが、実際、中国に長期滞在している欧米人ミュージシャンによるピアノやドラムの演奏は素晴らしかったです。

近くに、上海料理の美味しいお店もあるので、ゆっくり食事をした後、２１時前後に入店するのがおすすめです。

（６）ジェイズ・クラブ（JZ club）

日系ホテルのあるホテルオークラ上海（花園飯店）から北側、巨鹿路沿いの「Found158」という巨大な半地下の飲食店街にあります。イタリアン、メキシカン、寿司、ビアバーなど多国籍料理を楽しめるエリアになっています。ジャズバーの向かい側には、ヒップホップなどが流れるディスコもあり、香港のランカイフォンのような場所になっています。

ここも、日替わりで、ジャズだけでなく、ロックなどの音楽も楽しむことができます。他のジャズバーと同じですが、客層は欧米人と中国人の若者が大半で、日本人はほとんどみかけません。

いつも１２時前には帰るようにしていますが、その頃に、欧米人が続々やってくるのを目にするたびに、彼らにとっては宵の口なんだな、と思っています。

（7）ブルーノート上海

ニューヨークに本店を持ち、東京やイタリアのミラノなどにも支店を持つ有名なジャズクラブ。中国では、北京に続き、2019 年 9 月に上海の北外灘の四川北路沿いにオープンしました。面積は 1700 平米で席数は 300 という規模で、上海最大規模を誇ります。

音響設備もニューヨークと同基準で作られており、出演者はすべて米国本部が選択、手配、招待しています。しかしながら、現在は海外からミュージシャンを呼べないため、アマチュアのジャズバンドなども起用しています。

演奏は、午後７時から１０時まで、１時間毎に３回あります。１０時以降は、希望するお客さんが舞台に上がって歌うことができます。「ブルーノートの舞台で歌った」という素敵な思い出を作ることができます。

１００年余の歴史がある上海のジャズですが、１９５０年代から９０年代の不在の時期を経て、改革開放による経済発展を踏まえて、再び世界中からミュージシャンが集まり、毎夜演奏がされています。これが後の時代から見て、かつてのように本場アメリカのコピーとして消費されてしまうだけなのか、それとも、“上海リヴァイヴァル”というスタイルが生まれるのか、という点に注目しても面白いと思います。

日頃、システム構築プロジェクトにおいては、計画主導であることを重視していますが、その反動ではないですが、ジャズの持つアドリブや自由さやスイングの躍動感は、非日常性を体感できる貴重な機会だと思っています。

（＊１）https://jp.yamaha.com/sp/myujin/tag/ジャズ事始め
富澤えいち『ジャズ事始め』連載１３～１７